

助けあえる世界の一員になりたい

野口 荒野さん

ネパールの主都カトマンズで大地震が起きてすぐ、私は友人のバーシャにメールをうつた。刻々と伝えられる現地情報に胸をしめつけられながら、いのる気持ちで待っていた。そして数日後、ようやく彼女から返信がきた。I'm completely fine dear, we r in a bit safer place surviving somehow. Thank u for ur concern Areno. Missing u badly. 生きてたんだ、うれしかった。

彼女は十六才、私にとって何でも相談できる大切な友達、本当のお姉ちゃんならいいのになと思える優しい存在だ。日本の大学にきっと入学すると言ってカトマンズに帰ったのは半年前のことだ。

地震の後、数通のメールのやりとりができたが、悲しくつらい内容だった。荷物は届かないから送らないで、ともあった。水道、電気、通信も家では使えない混どんの中にいるのだと予想している。

バーシャのためにはげましのメールを送ることしかできない自分がもどかしく、切ない。「荒野は日本に生まれて本当にうらやましい。勉強できる環境に守られてるよ。」と泣きながらつぶやいた彼女の顔が思い出される。

オバマ大統領の二回目の就任演説の印象的なフレーズ、「ある貧しい通りにたたずむ一人の女の子のことまでも幸せにするとちかう」という力強い言葉を覚えている。しかし、大国に生まれた子どもがみな恵まれた環境にあるとは限らないだろう。途上国の災害時においてはなおさらのことだ。国の力が及ばないところでバーシャに聞いた貧しさと困難に心をよせて、手をさしのべるべき第一歩は医療ではないだろうか。

私自身、三年前に父が亡くなり、つらい経験もいっぱいしたが、周囲の人々に助けられて今日があると感じている。その父が私にさすってくれた英語を学ぶという課題に立ち向かい、英検一級をめざして日々けんめいに学んできた。合格の報告ができたら父が喜んでくれると信じて取り組んでいる。今までお世話になったことへの感謝にかえて、苦しむ人々の中にまっ先にとびこんで、かけ橋となって働きたい。助けあえる一員になるために、災害医療の道を夢見て、体力を向上し、精一杯勉強するのだと今回のことからさらに強く思うようになった。私は頑張る。バーシャ、待っててね。